

アフリカ理解プロジェクト

## 「日本におけるアフリカ情報」アンケート調査

実施日：2005年5月21日 - 22日

実施者：アフリカ理解プロジェクト

分析者：岸上有沙・中家由加利

I.	調査の背景・対象.....	2
	【調査の背景】.....	2
	【調査対象】.....	2
	【調査方法】.....	2
II.	回答者の特徴.....	2
	+ 年齢 + .....	2
	+ 職業 + .....	4
	+ 出身国 + .....	5
	+ 日本滞在年数・理由 + .....	6
III.	日本におけるアフリカ情報について.....	7
	+ 情報源 + .....	7
	+ よく使う情報ソース + .....	8
	+ 回答者の出身国に関する日本での報道について + .....	10
	+ 最近日本で報道された回答者（アフリカ出身者）の国での出来事について + .....	12
	+ もっと必要な情報とは + .....	13
IV.	全体を通して.....	14
	【アンケート結果】.....	14
	【調査に関して】.....	14
	【アフリカン・フェスタに関して】.....	15

## I. 調査の背景・対象

### 【調査の背景】

アフリカ理解プロジェクトでは、多くの人たちに多様なアフリカを理解してもらうことを目的に、WEB作りや教材製作、アフリカに関する活動の支援などに積極的に取り組んでいる。その活動の一貫として、アンケート調査を毎年行っており、昨年のアフリカン・フェスタで実施したアンケートへの反応が高かったことから、今年も実施に至った。

アフリカの情報が少ない、偏りがあるのでは、という声を日本ではよく耳にするが、実態はどうなっているか、気になる人は少なくないだろう。このような背景から、今年度もアフリカ関係者や、在日アフリカ人が多く集まる、アフリカン・フェスタの場を利用して「日本におけるアフリカ情報」調査を行った。

### 【調査対象】

本調査は2005年5月21日、22日に開催された「アフリカン・フェスタ2005」の会場で実施。アフリカン・フェスタの参加者で主に在日アフリカ人の方を対象にした。取材許可を取得し、調査を行ったため、会場全体で調査を行うことができた。

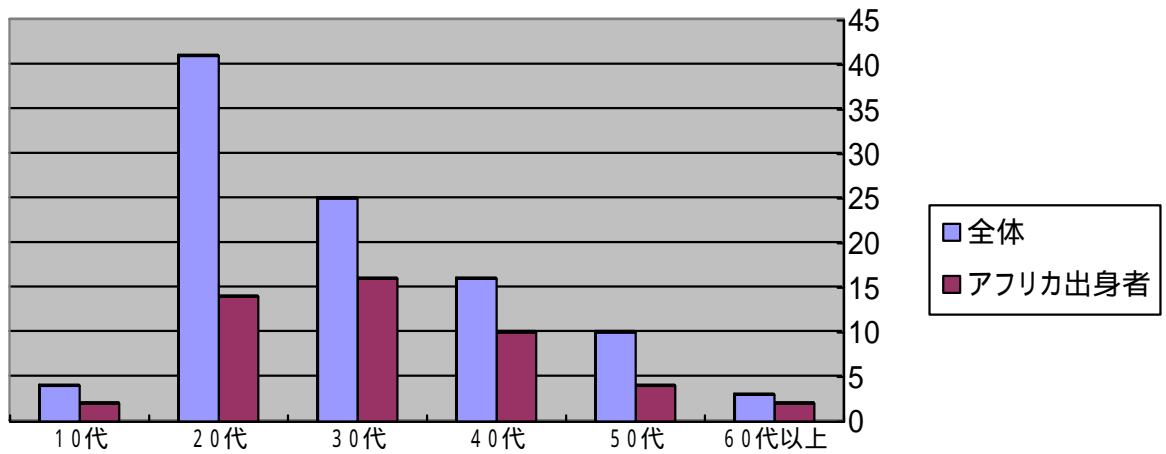
### 【調査方法】

調査方法は、A4 1枚に和文・英文で質問表を作成。アンケートは4つの質問からなり、ひとつの質問につき、1～5の項目を設定した。アフリカン・フェスタ当日の調査は、一日目5名（ケニア人・コートジボワール人各一人、日本人3人）、二日目3名（日本人3人）を中心に行った。その結果、合計103名から回答が得られた。元々在日アフリカ人を主な対象としたため、調査のまとめにあたっては日本人とアフリカ出身者、それ以外、にデータを区別して分析を行った。（カッコ内を書いてある数字は、その他の表記がなければアフリカ出身者（数字が1つの場合）、アフリカ出身者とそれ以外の外国出身者（数字が二つの場合）を示している。

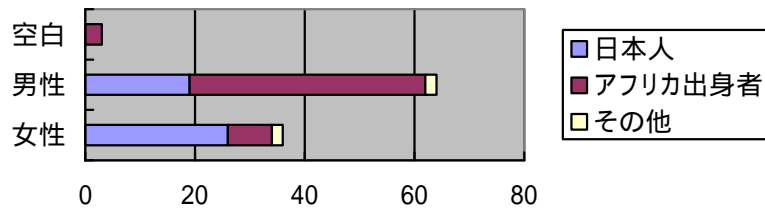
## II. 回答者の特徴

+ 年齢 +

10代が4人（2, 1）20代が41人（14, 3）30代が25人（16, 1）40代が16人（10, 0）50代が10人（4, 1）60代以上が3人（2, 0）（空白4, 0）だった。



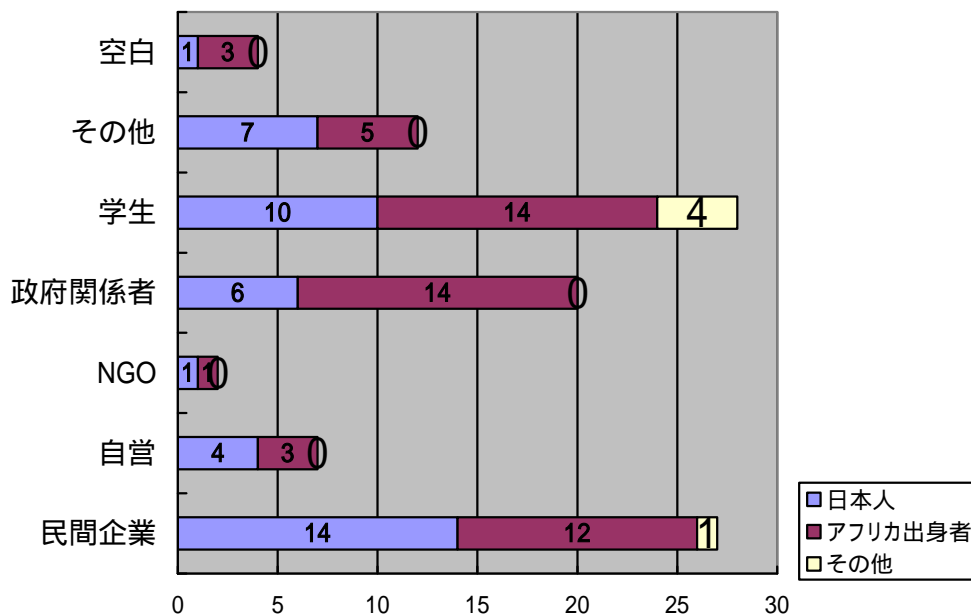
+ 男女比率 +



	女性	男性	空白
□その他	2	2	0
■アフリカ出身者	8	43	3
■日本人	26	19	0

回答した女性は36人、(日本人26名)、空白は3人。男性は64人(日本人19名)。アフリカン・フェスタへの参加者全体として女性が多かったが、このアンケートに回答した在日アフリカ人は男性が多くなっている。日本人の中では女性がよりアフリカに関心を持っていることが感じられた。又、来場していた在日アフリカ人は男性が多かったが、理由の一つとして政府関係者に男性が多いことが考えられる。

+ 職業 +

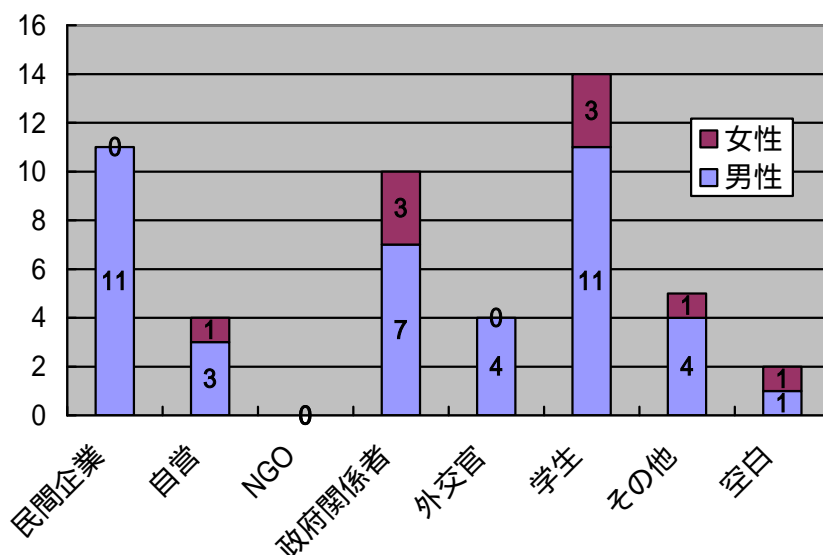


「その他」と答えた中で具体的に「外交官」と答えた人が多かったので、これは「政府関係者」の中に加えた（日本人1名、アフリカ出身者4名、内1人は Ambassador）。又、「政府関係者」と答えている中で「外交官」に該当する方もいるかもしれない。「その他」の中には、教師（日本人1人、外国人1人）、妻（外国人1人）が含まれていた。「民間」の中には「Employed」と回答した人一名が加えられている。

回答者で全体的に多かったのは、学生、民間企業、そして政府関係者であった。アフリカ出身者は、この三つがほとんど変わらない割合で参加（回答）していた。一方、日本人のみでは、意外にも民間企業関係者が最も多く、次いで学生や政府関係者であった。

(アフリカ出身者の職業別男女差)

アフリカ出身者の人数が上記の図と異なるのは、性別を記入されなかった方が数名存在したことによる。



ここで、職業と性別のデータを合わせてみると、アフリカ出身者の男女比はどの職業も男性に偏っていることが分かる。しかし、女性は当日食べ物関係のブースに出展していてアンケートに回答しにくい立場にあったことや、次の週に大使夫人によるバザーが控えていてその準備に追われていたことが推測できるため、必ずしもこれが日本における在日アフリカの方の男女比を反映しているとは言えない。

+ 出身国 +

+ 出身国 +			
アフリカ	北アフリカ (3人)	チュニジア	2
		モロッコ	1
	東アフリカ (23人)	エチオピア	1
		ウガンダ	3
		タンザニア	5
		ケニア	14
		西アフリカ (13人)	ベナン
	セネガル	1	
	シエラレオネ	1	
	マリ	2	
	コートジボワール	2	
	ガーナ	5	
	ナイジェリア	1	

	中央アフリカ (6人)	カメルーン	1
		コンゴ共和国	1
		コンゴ	2
		スーダン	2
	南アフリカ (6人)	ジンバブウェ	1
		モザンビーク	1
		マラウイ	4
		南アフリカ共和国	1
ヨーロッパ	イギリス	1	
	(US)スペイン	1	
アジア	インドネシア	1	
	タイ	1	
	日本	45	

< 考察 >

アフリカ、ヨーロッパ、アジアの3つに回答者数を分け、それを各大陸の国ごとに分類した。

東アフリカ出身者が23人と一番多く、その次は西アフリカ(13人)であり、南部、北部と続いた。国別では、ケニアの14名が最多であり、次に多いタンザニア(東・5名)、ガーナ(西・5名)と大きな差がある。東アフリカからの回答者が最も多く、特にケニアから来日している人が他のアフリカ諸国に比べて多いことが推測できる。南部の出身者が意外と少なく、本アンケートでは中央アフリカ出身と同じ人数だった。北アフリカ出身者は2カ国3名であった。

+ 母国語・主要言語 +

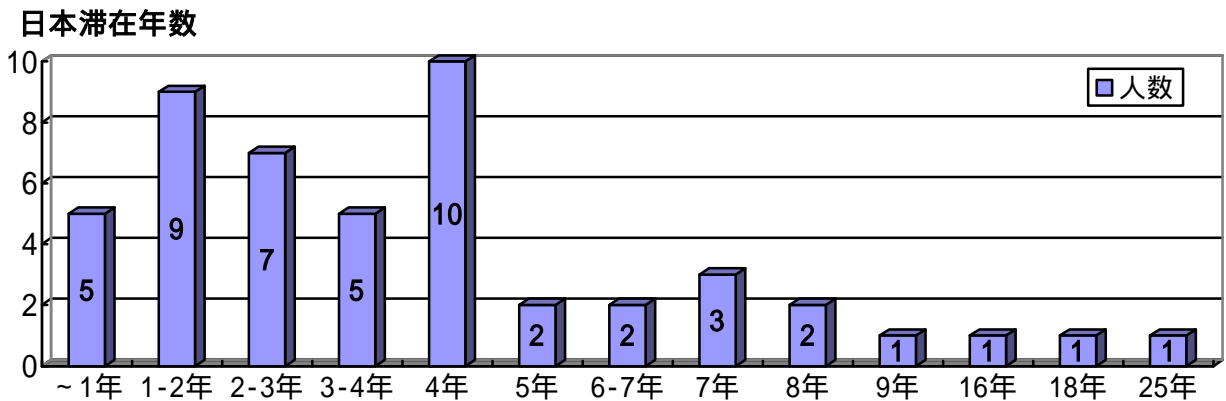
アラビア4名、チチェワ3名 英語8名、Ewe2名 フランス語2名、スワヒリ語9名、ルオ語2名、リンガラ語2名、日本語45名、その他21言語(各1名)

< 考察 >

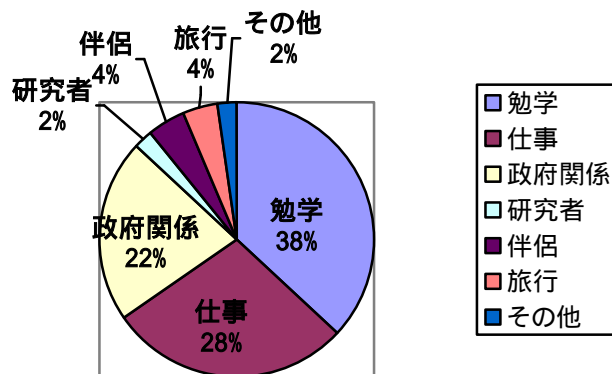
英語や日本語を公用語として使うことは多いが、それぞれの母国語・主要言語として認識されている言語は多様であり、思っていたほどの偏りはなかった。

英語を挙げている8名の回答者のうち、4名はケニア出身であった。

+ 日本滞在年数・理由 +



### 日本滞在理由



#### <考察>

在日の方々の主な滞在理由は、留学とビジネスであった。最も長い滞在者は25年で、滞在理由はビジネスだった。そして最も多かった滞在年数は4年であった。データから見ると、滞在理由と滞在の期間の相関関係はあまりなかった。政府関係者のうち7人は外交官、1人は公務員、1人は大使、1人はビジネスが滞在理由であった。

### III. 日本におけるアフリカ情報について

#### +情報源+

新聞紙... 39 (17、1)名、インターネット... 62 (37、1)名、テレビ... 29 (13、0)名、雑誌... 21 (10、0)名、ラジオ7 (4、0)名、その他... 26 (14、4)名、全て空白... 2 (1)名

Other と回答した人の詳細 26人

At Office : 1人 (0人)

Embassy : 3人 (3人)

IFE NGO : 1人 (1人)

Kenyan Nps: 1人 (1人)

Washington Times: 1人 (1人)

People: 1人 (1人)

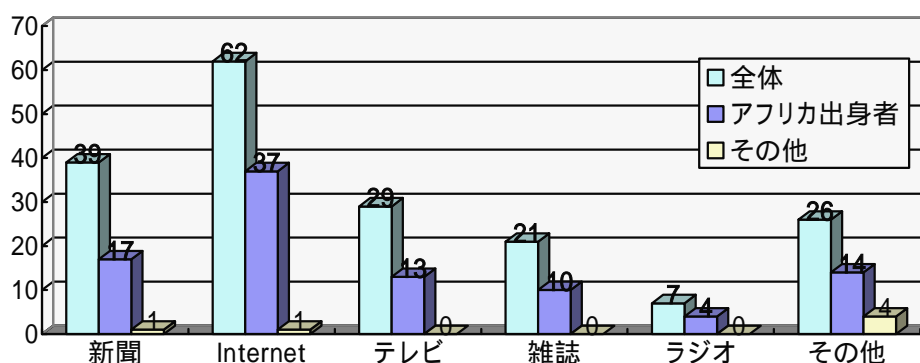
Friend : 7人 ( 3人 )

Phone: 1人 ( 1人 )

word of mouth: 1人 ( 1人 )

子供 : 1人 ( 0人 )

空白 : 7人 ( 5人 )



#### < 考察 >

インターネットを情報ソースにする人が最も多く、次いで新聞、テレビであった。又、日本人以外の回答者の中では、その他の意見として、大使館、電話等により生の情報を得ていることも分かった。ラジオや雑誌から情報を得る人は複数の情報源を使っていることも分かった。ラジオを聴いている人は、全員、新聞も読んでおり、雑誌を読んでいる人は新聞に限らず複数のメディアを使っていた。

その他の選択肢の中では、友人など、他者から情報を得ている人は11人、企業や団体から得ている人は5人いた。その他と回答した人たちは複数の情報源はあまり使わない傾向がある。

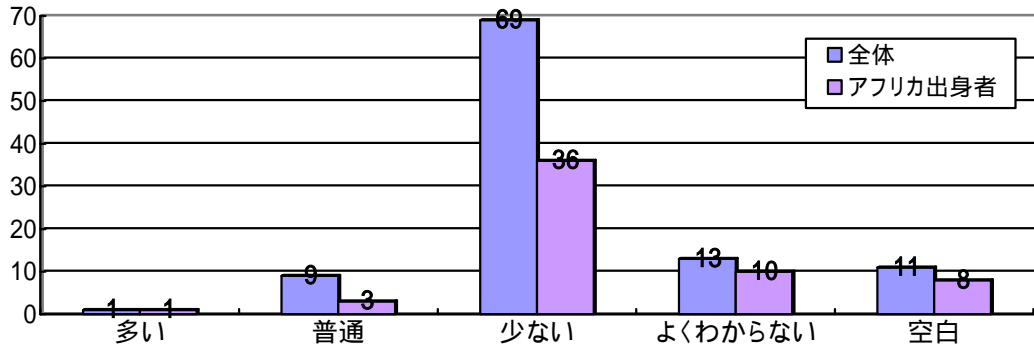
#### + よく使う情報ソース +

- 新聞 ( 読売新聞 2 (1)、毎日新聞 1(0)、Japan Times3(3)、朝日新聞 2(0)、日経新聞 1(0) )
- インターネット ( BBC ニュース 2(1)、外務省ホームページ 2(0) Africa Information HP1(0)、www.allafrica.com2(2)、Japantoday.com1(1)、newsonjapan.com 1(1)、aljazeera.net 1(1)、Africatime.com1(1) )
- テレビ ( NHK2(0)、バラエティー番組 1(0) )
- 雑誌 ( Monthly African Magazine、AERA、Newsweek、Times、各 1名 )
- メールマガジン 1(0)
- ラジオ ( BBC1(0) )

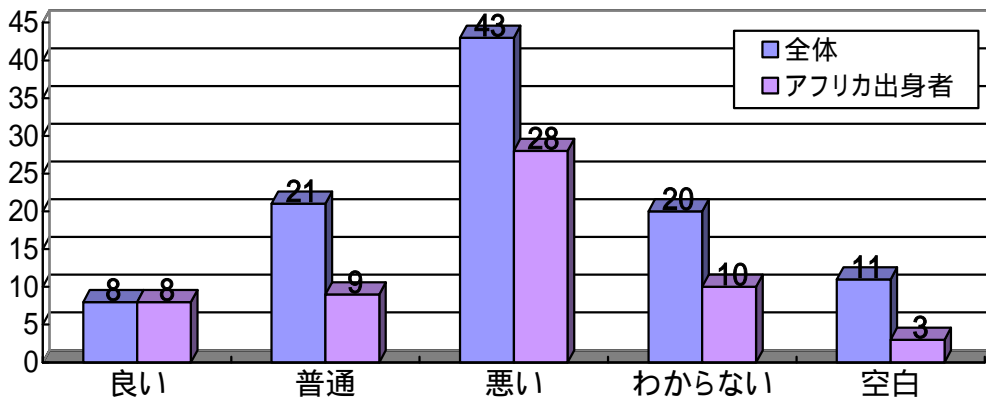


+ 日本のアフリカ報道について +

量：



質：



< 考察 >

量としては、全体的に不足しているという意見が多かった。しかし、質については8人の人が「良い」と答え、その回答者は全て日本人以外の人であった。又、量と同様に「悪い」と答える人が多かったが、量に対する回答に比べてばらつきがあることが伺える。

\* 理由 \*

アフリカに関する情報の質や量について回答した人の理由をさらに具体的に聞いてみた結果、以下のような返答が得られた。

日本人 (回答者 16人)	日本人以外 (回答者 23人)
情報が偏っている × 4	ネガティブな部分の放送しかない × 5
情報が不足している × 3	文化の違いから情報が不足している × 3
情報が現状と異なる × 4	情報が偏っている ×
前より良い・番組によっては評価できる × 各 1	日本は他国を歓迎する (他国への配慮がある)
	関心のある情報がない × 2

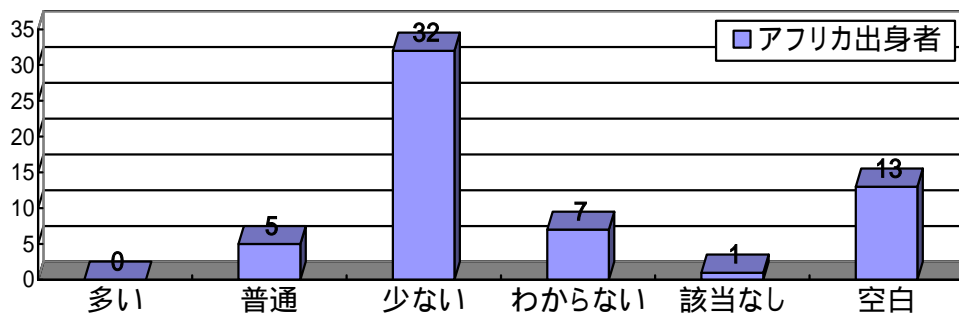
日本人の答えでは、情報が偏っている等の答えが得られた。具体的には、「動物・貧困・危険・日本人が信じたいイメージ」等の情報に偏っていると意見が得られた。又、情報の全体量が少ないため、イメージしにくいという意見もあった。日本のTV業界では、NHKの報道を評価する人もいた。

日本人以外では、ネガティブな部分の情報ばかりだという意見が多く、その理由として資金集め等をしたい NGO・NPO に影響されるからというコメントもあった。他に偏った情報としては、「ジャングルの生活・ケニア等の限られた国だけ・ステレオタイプを促す情報、衝撃的な事象」等が挙げられた。

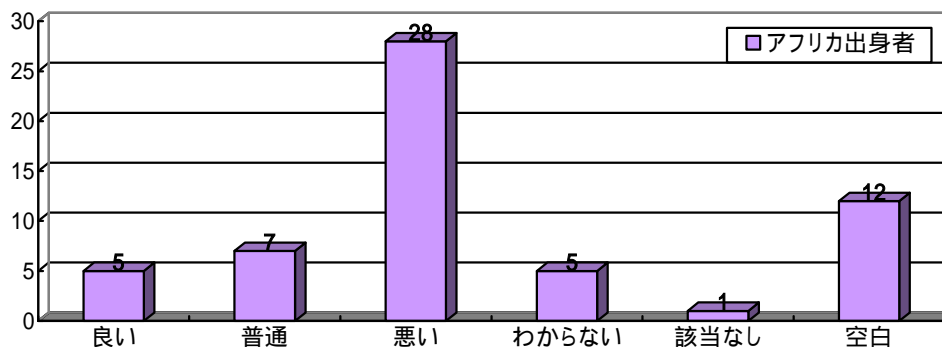
又、日本社会がアフリカに対して閉じているという意見や、日本とアフリカにおける文化の違いから情報が不足しがちなのではないかという意見もあった。逆に、日本人は他国の人々を歓迎するのが得意であり、他国への配慮が十分だという肯定的な意見も得られた。日常的なニュースや、現状を伝えるニュース等、在日アフリカ人にとって一番関心のある情報を得ることができないという意見も得られた。又、言語の壁によって日本で発信されている情報が分からないという意見もあった。

+ 回答者の出身国に関する日本での報道について +

量について：



質について：



< 考察 >

全体的に、情報は十分な量があるとは感じられていない。しかし、「アフリカは日本から遠く、関わりが薄いから、これ以上に報道する必要はないから十分だ」という意見も、アフリカ出身者自身から聞くこともあった。

情報の質は全体的に悪いという意見が多いが、「良い」「普通」という回答者が意外と多く、回答者の2割以上を占めた。又、2つの表より、質に比べて量の方に不満が強いことが伺える。

\* 理由 \*

日本人以外の意見（回答者21人）（スペイン・インドネシアに対する情報は排除）
ネガティブな部分の放送しかない
情報が偏っている（欧米の情報に頼っている）
日本は他国を歓迎する（他国への配慮がある）
効果的である
日本からとても遠いから
モザンビーク関係者が日本のメディアにあまり協力的でないから
情報がほとんど無い×3

回答者は21名だったが、スペイン人・インドネシア人の自国に対する意見は、今回の調査内容とは異なるので、上記の表からは省いた。

アフリカ全体に対する意見と同じ意見を挙げた人が半数以上存在した。これは、自国に対する情報と、アフリカ全体に対する情報の現状が同様であることが伺える。又、自国を具体的に報道対象とする情報があまりに少ないので、アフリカ全体の現状と区別して答えにくいということも考えられる。

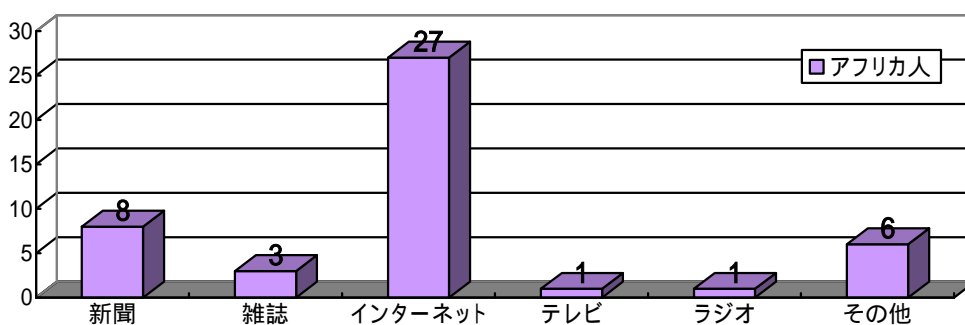
情報が少ないという意見に付随する具体的なコメントとして、「ガーナでの野口英世の活動

はガーナで良く知られているが、日本では野口英世がガーナで研究を進めていたことを知る人が少ない」、「ケニア等東アフリカの情報に偏り、それがアフリカ全体のイメージとなっている」等が挙げられた。

又、アフリカ諸国（例えばモザンビーク）から記者を日本に派遣する研修システムが日本に存在するが、その時期を今回のアフリカン・フェスタ等の大きなイベントに合わせ、アフリカ諸国でも日本の取り組みを伝える努力ができれば、という意見も挙げられた。

+ 最近日本で報道された回答者（アフリカ出身者）の国での出来事について +

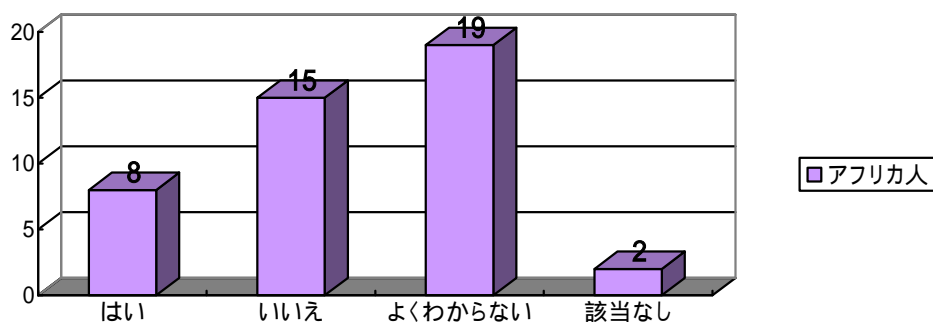
### 情報源



### < 考察 >

最近日本のメディアで取り上げられた出身国に関するニュースについてインタビューしたところ、インターネットから得られた内容のものが多かった。選択肢としてあげられた、その他と答えた人の中には、「友人」や「親」と、人も挙げられていた。

### その報道の公平性

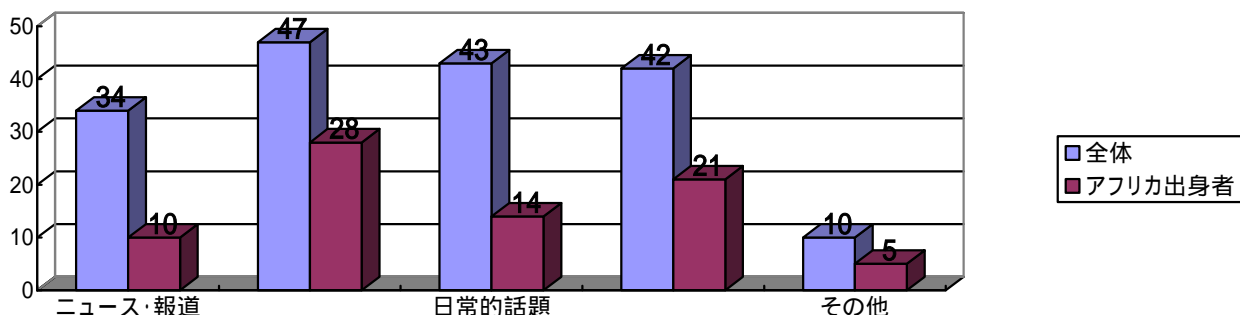


### < 考察 >

具体的なニュースの公平性に関しては、「よくわからない」と答えた人が多かった。その理由の一つとして、事実関連を伝えるだけの情報が多く、公平性が損なわれることが不可能

な報道内容が多かったことが挙げられる。又、「はい」にくらべて「いいえ」と答えた人は倍近くおり、全体としては公平性を欠く内容が多いと感じる人が多いことが分かる。

+ もっと必要な情報とは +



もっと必要な情報としては、文化・スポーツ、日常的話題、国紹介・観光案内がほぼ同じ数で上位3つであった。日本人以外の回答を見ると、文化・スポーツが一番多く、その次に国紹介や観光案内が続いている。

その他と回答した日本人は具体例として「貧困」「地形」「環境」「政治・ODA」「価値観」をあげている。それに対して日本人以外の回答者は、「政治体制・資源」「アフリカのイベントを日本のメディアでもっと取り上げるべき」などと回答していた。

\* 理由 \*

日本人の意見 (回答者 16人)	日本人以外の意見 (回答者 13人)
日常的な話題について知りたい×4	意見交換するため
文化やスポーツに国境は無いから	経済的な可能性を見せるため
人々が興味を持つきっかけとなるから	実際の生活を知って欲しいから
どの情報も不足しているから	一部の国じゃなくて、アフリカ各国の基礎情報の必要性を感じるから
アフリカが遠いため、情報でしか知りようがないから	日本でアフリカの情報にもっと触れられるように
偏見をなくしたい	現状ではネガティブな情報ばかりだから

具体的な理由を書いた日本人のほとんどは、「日常的な話題」の情報が必要だと選択した人である。そのことから、時事問題を通してアフリカ諸国の問題は多少見えてきても、人々の生活や、自分たちと共通する文化やスポーツが分からないため、身近に感じる事が難しいことが考えられる。

具体的な理由を書いた日本人以外の人の中では、「文化やスポーツ」の情報が必要だ

から、と回答した人が最も多かった。情報だけでなく、スポーツや文化等の交流を増やすことから、アフリカ諸国と日本が近くなることを望んでいることが伺える。

#### IV. 全体を通して

##### 【アンケート結果】

調査に協力して頂いた 103 名のうち、在日アフリカ人が 51 名、日本人が 45 名であった。このうち、在日アフリカ人回答者の職業は学生、民間企業、政府関係者が多く、そのいずれでも男性の方が多い状況であった。一方、日本人回答者の職業は民間企業関係者が最も多く、次いで学生、政府関係者であった。

出身国別には、東アフリカ出身者が最も多く（23 人）、次いで西アフリカ（13 人）、南部（6 人）、北部（3 人）がこれに続いている。使用する母語・主要言語では、スワヒリ語（9 人）が最も多く、英語（8 人）がそれに続いたが、他の言語はあまり偏りなく使用されていた。

調査結果では、多くの回答者がアフリカ全体、又は個々の国に関する情報はまだ少なく、質は、情報が偏っている、不足している・現状と異なる等、乏しいものであると答えている。又、発せられる情報が主に「貧困・危険」等限られた範囲であり、このことがさらに日本人をアフリカ大陸から遠ざけている一因であると考えられる。政府機関・NGO 等、援助や開発に関わる団体が圧倒的にアフリカとの接触が多く、ビジネス等の連携が少ないことが日常的な情報の少なさとなんらかの関係があるかもしれない。

この現状を変えるためには、日常生活の一部や文化・スポーツ情報をもっと公開して欲しいという意見が、日本人・外国人ともに多くあった。日本人回答者は、「国境のない文化やスポーツや、日常的な話題を知り、もっとアフリカを身近に感じたい」と考え、在日アフリカ人回答者は、「一部の国やネガティブなイメージ等偏った情報だけでなく、経済的な可能性、実際の生活等の情報を発信して日本とアフリカ諸国の溝を埋めたい」と答えている。

調査者は、以前より「日本におけるアフリカの情報が少ない、偏りがある」という意見を良く耳にすると記述したが、本調査よりそのことが裏付けられた。アフリカの現状を伝える情報に加え、日常的な話題や文化・スポーツなど、アフリカの生活や可能性を見出せるような情報が発信されることを視聴者を望んでいることが伺える。

##### 【調査に関して】

去年の 60 名に比べ、今年は 103 名と倍近くの回答者を確保することができた。その要因の一つとして、今回のアンケートが、回答者自身が関心のあるテーマであったことが、

率先して答えてくれる回答者が多かったことから伺える。アンケートの聞き取り方法、選択肢の作り方等、アンケート実施側が前回より経験を積んでいたことも回答者を増やした背景にある。又、在日ケニア人・コートジボワール人の方にアンケート項目の作成から当日のアンケート実施、そして実施後のアンケート翻訳にも関わってもらえたことより、実施対象者（特にフランス語話者）・結果報告ができる人の幅を広げ、今回のアンケート内容の充実と意義に大きな影響を与えたと思われる。

昨年は、調査を日本語のみで行ったため調査対象者が限られたが、今回は在日アフリカの方々を第一の対象者として英語のアンケート用紙も作成したため、より多くの方から回答を得ることができた。3番目の問、「日本のメディアで報道される「あなたの出身国」のニュースについてどう思われますか」は、対象者をアフリカ出身の方に明確に限定しなかったため、日本人回答者を惑わしてしまったことは実施側が反省すべき点であると思われる。又、今回の調査ではアフリカ出身者以外は対象からは省いたが、アフリカ以外の外国出身者が日本で得られる自国の情報に関してどのように思われるか、調査し比較する価値も感じられた。「アフリカン・フェスタ」と類似した他地域・他国のイベントで調査されることを期待したい。

#### 【アフリカン・フェスタに関して】

主催者による発表では、アフリカン・フェスタ来場者数は年々増加傾向にあるという。調査者自身も調査を行う過程でそれを肌で感じる事ができた。又、これは推測に過ぎないが、大使館側のブースに、以前より大使館関係者以外の在日アフリカ人の協力が増え、大使館側とNGO側のブースの距離が縮まったように感じた。しかし、あまりの混雑に来場者がブースの中に入れず、ひどい時は移動すら出来ない状況にあった。この参加人数が今後も持続して保たれるのであれば、もう少し広い会場を確保すべきではないかと感じた。予算削減でアフリカン・フェスタの存続自体が危ぶまれていると聞くが、来場者の数も増え、年間行事として定着してきたアフリカン・フェスタの開催を今後も続けられることを希望したい。

アフリカ理解プロジェクト 岸上有沙・中家由加利